

宮本憲一先生「信州宮本塾・沖縄講演」

4日午後、信州宮本塾で開催された宮本憲一先生の講演にズームで参加した。テーマは「復帰50年の沖縄の歴史 現状・課題」。先生は久しぶりに信州・望月に行かれて、多津衛民芸館で講演された。民芸館にいちどだけお邪魔したことがある。冒頭、ズームより、やはり「生」がいいと塾代表が挨拶した。

講演は1969年3月の最初の沖縄調査から始まった。「基地の中に沖縄がある」という状況に深刻な衝撃をうけた。反戦平和・基本的人権・沖縄の自治権の確立という「沖縄のこころ」の実現に、終生力を尽くすことを誓った。

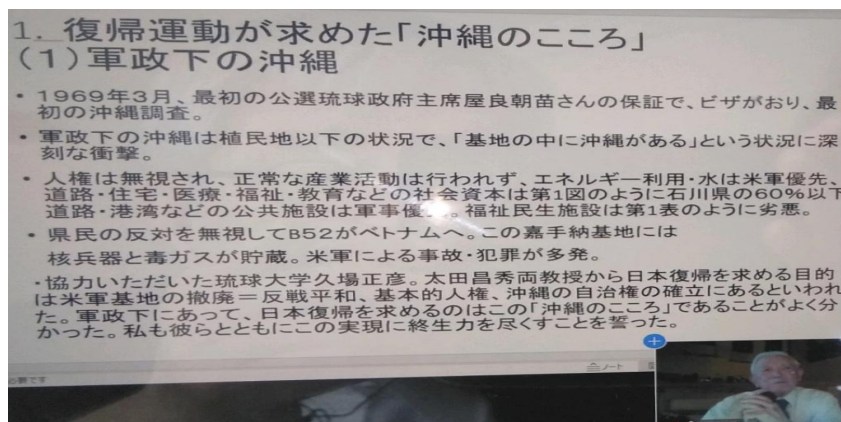
沖縄の復帰政策を振り返り、1971年11月の「復帰措置に対する建議書」、それを無視した政府・国会へと話をすすめる。50年後の沖縄の現状について、軍事基地の動態と経済・社会問題、沖縄県振興(開発)計画と国家財政への依存経済、沖縄予算の安保重視と基地関連の賄賂のような特例措置などをとりあげる。

そして「沖縄のこころを高く掲げよう」と、次のように先生の思いが語られる。世界は地球環境の危機、コロナパンデミック、ウクライナ戦争という3大危機に陥っている。政府はこの危機を逆手にとって、平和主義の憲法を改定しようとしている。危険なことは軍拡の保守政治勢力やマスコミの異常な戦争の恐怖の宣伝によって、世論が日米政府の軍事ブロック強化へと同調し始めていることだ。これは沖縄を戦場にする危険である。改めて反戦平和の旗を掲げねばならない。

ノーモア沖縄戦の運動を、オール沖縄の運動に発展させることを期待したい。辺野古新基地の建設反対、自衛隊の沖縄増強反対を本土の護憲の運動の柱としたい。

じつは先生の講演を外出先で拝聴した。パワーポイント資料を見ながら、90分余り集中して耳を傾けメモをとった。都合により、休憩後の質疑は地下鉄のなかで視聴することになった。ウクライナ戦争に関わり、「もし日本が侵略されたら、どうするか」といった議論が話題になっていた。

先生は沖縄戦などの教訓から、戦争を起こさない外交、政治が大切であり、「好戦的」な世論に警鐘を鳴らした。じつは、ある研究者の「発言」に対し、私も問題の立て方に異論を提起したことがある。かつてないほど「危機」を感じる時代状況だ。



(2022年5月6日)